

速報

周作クラブ会報

(第79号)
2020年7月5日発行

周作クラブ

◆主な記事◆

未発表小説発見！ 連載エッセイ	1面
連載・樹座30年⑩	2面
長崎文学館便り	3面
周作クラブ長崎便り	4面
サロン・ド 遠藤周作	5面
私が選ぶ遠藤周作 この作	6面
お知らせ欄	7面
	8面

遠藤周作の未発表小説、見つかる 純文学作品「影に対して」104枚

創立20年を迎える長崎市遠藤周作文学館で、未発表小説「影に対して」の、本人による第一稿と、秘書による清書原稿が見つかった(6/26記者発表)。没後に日記や手紙等は発見されているが、完結した小説原稿は初めて。しかも遠藤文学の原点ともいえる「母」と「人生」をテーマにした純文学作品であり、これがいつ書かれたのか、なぜ未発表のままとなったのか、今後の調査が待たれる。

(記/加藤宗哉)

見つかった原稿について
原稿用紙には、いずれも欄外に「東京都町田市本町田玉川学園 遠藤周作 原稿用紙」と印刷されていることから、書かれたのが1963年3月以降であることが分かる(ちなみに『沈黙』は66年)。

原稿用紙の裏側に小さな鉛筆の文字(遠藤本人による)がびっしりと埋められた2枚が見つかった(写真右)。純文学作品に向かう際の遠藤の習性で、生涯に5作書かれた書下ろし作品も、すべてこの手法で書かれている(1枚

で、400字詰原稿用紙およそ6枚分となる)。

この第一稿を秘書が清書し、そこへ更に手が加えられて原稿は完成されるが、今回見つかったのは、その完成原稿(写真左)で、合計104枚。秘書をつとめていた塩津登美子さんによつて、それが自身の書いたものであることが確認されたが、何年頃に書かれたかは判明していない。この清書原稿にも遠藤の鉛筆での修正跡が残り、さらに筆者不明の書込み(漢字の訂正、内容の矛盾への指摘)も見られた。

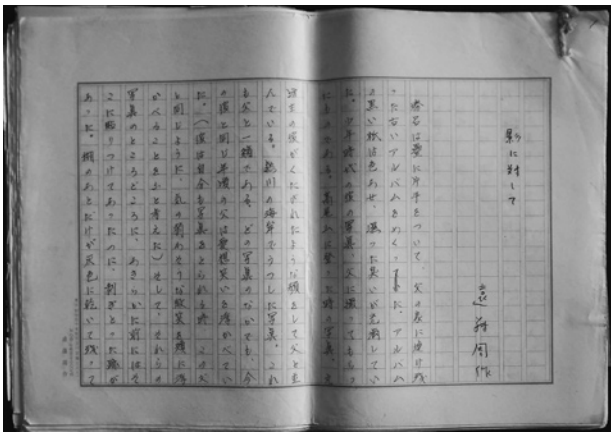
小説の内容と、作品の重要性

主人公は翻訳で生計を立てる勝呂。父母はすでに離婚しているが、母は音楽家として大成することなく、勝呂が結婚する前に死んでいる。その母を見捨てた自責の念もあり、知人を訪ねて母の生涯を追うという展開。主人公が見据えるのは、「生活」ではなく「人生」を生きることの価値であり、その象徴が、真冬の寒さのなかでもヴァイオリンの稽古をやめずに、指先に血をにじませている母の姿である。遠藤文学では、短篇「六日間の旅行」「私のもの」「船を見に行こう」などにもみられる、中国・大連での体験をもとにした「父母の離別」を描くものだが、今回の「影に対して」では、離別の後も主人公は父親と大連に残るという設定になっていて、母への「へウシロめたさ」をより強める作品となっている。

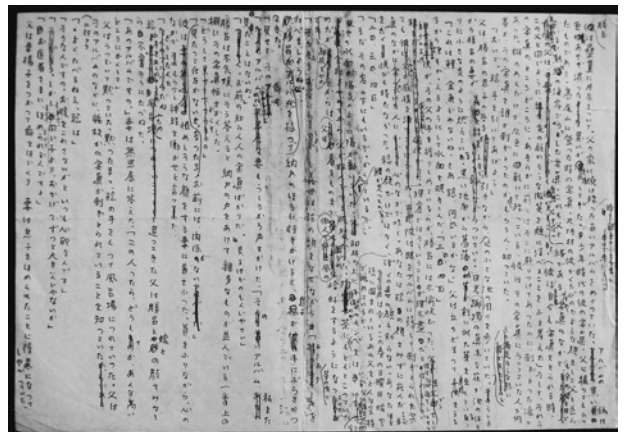
なぜ未発表になったのか

それにしても、なぜこの作品が発表されなかったのかは、謎である。考えられるのは、当時はまだ健在ではあったが絶縁状態だった「父」と「その再婚相手」への、息子なりの配慮があったのでは、という推論である。人生の最期でようやく和解した父への無言のいたわりが、「未発表」という形に隠れているのかもしれない。

※この小説は雑誌「三田文学」夏季号(7月10日発行)に掲載されます。詳細は「お知らせ」欄(最終面)を参照してください。



秘書による清書原稿(題字・署名は本人)



草稿1(冒頭)